



進化する成田空港 LCC参入で国際新時代の幕開け

大学2年の夏だった。1985年、生まれて初めての海外、初めての渡米、そして国際線の初利用に、胸ふくらませて向かった先は成田国際空港だった。

開業したての東京ディズニーランドを横目に成田へ車で見送られ、「今から私が行くのは、カリフォルニアの元祖のほう」と、ほくそ笑んだ。

今はなきパンナム機に乗り込んだときの胸の高鳴りは、今も記憶に鮮明だ。

ホームステイ先でホストマザーが流してくれた「スキヤキ」というレコードには驚いた。幼少から慣れ親しんだ坂本九さんの「上を向いて歩こう」がスキヤキ・ソングと呼ばれ、アメリカの流行歌になっていた。

一転、帰りの機中で知らされたのは、日航機墜落という衝撃的なニュースだった。墜落の翌日、8月13日に日本に帰国したのだが、同乗者のなかには羽田へ移動して、同便で大阪の実家に戻る予定の学生もいたから大騒ぎとなった。

墜落犠牲者のなかに九さんがいらしたというニュースにも、大きな衝撃を受けた。その翌月に発表されたプラザ合意から一気に円高が加速して、日本は空前の海外旅行ブーム期へと突入する。

今、振り返れば1985年は自分にとってエポックメイキングな年だった。

●人生にいつもナリタがあった

それからの私の人生には、いつもナリタがあったように思う。

学生時代、そして社会に出てからの旅、ハネムーンや家族旅行、さらには今なお頻繁な取材旅でもお世話になる。旅行会社勤務時代の添乗業務とあわせると、これまでの利用は200回をゆうに数えた。



タラップで千葉さん

そこには多くの出会いと別れがあった。懐かしい再会もあった。添乗前に外貨両替をと立ち寄った空港内の銀行窓口でのこと、かつて勤めていた銀行の元上司に出くわした。「こんなところでお会いできるとは……」と驚く私に、「好きな仕事に就いたんだね、頑張ってる」と励まをいただいた。すべてがドラマのような出来事の数々だ。

しかしそれは2010年、羽田空港が再国際化を迎えてから様子も変わった。気がつけば、近くて便利な羽田をついつい選んで旅立つようになっていく。

それが、こうして無沙汰していたすきに、あのナリタが大きく変貌しつつあると耳にした。なぜなら日本産LCC「ジェットスター・ジャパン」と「エアアジア・ジャパン」の2社が、この夏、相次いで成田に就航するからだ。札幌や福岡、那覇の各都市が、これまでにない安さで成田と結ばれ、LCC国内線の一拠点として新時代を迎える。

そこで先日、千葉県庁と成田国際空港株式会社の協力を得て、変わりゆくナリタを視察した。

急ピッチで建設が進められていたLCC国内線施設はあくまで暫定的なもので、専用ターミナルの完成は秋ごろを

予定するとか。しかし、すでにLCC初号機も乗り入れて、就航準備は着々と進められていた。

ナリタはかつての賑やかさを取り戻し始めている。激しい空の競争はスピード感にあふれハード(施設)が後追いするほどだが、今後は路線も拡充されて、人の流れが変わるだろう。

●羽ばたけ 学生よ

LCC就航で成田に新たな需要が増すのは必至だが、単に利用者がダウングレードするわけではない。とりわけ注目したいのは、首都圏初のビジネスジェット専用ターミナル「ビジネス・アビエーション・ターミナル」の誕生だ。

プライベートジェットで世界をまたにかけるトップクラスの人たちを対象にしたCIQ機能付き専用ターミナルは、開設からわずか3ヵ月で50回近い利用実績をはじめた。今後はさらに、利用が伸びることだろう。

2012年は、あなたにとってエポックメイキングの年かもしれない。

時間に大きな制約のない学生という特権を活かして、あのナリタから地方へ、そして世界へと羽ばたいてほしい。

旅は心の視野を広げてくれる。若いころの旅は自分を成長させてくれる。まずはLCCから始めてみよう。

自分が主役の「人生」というドラマに、空港はうってつけの舞台となるだろう。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。横浜商科大学・城西国際大学・東京成徳短期大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの潮流」(学芸出版社)など多数。